

## 私立小学校在籍者の親の階層と意識

田 中 節 雄

The Classes and Views of the Parents of the Pupils of a Private Primary School

Setsuo TANAKA

### 1. はじめに

#### (1) 課 題

1990年5月現在全国の小学生は9,373,295人である。そのうち私立の小学校に通学している子どもたちは63,790人(0.7%)いる。学校数で見ると、全国24,827校の小学校のうち、私立小学校は168校(0.7%)である。

このように現代日本の教育のなかでは量的にはごく一部を占めているにしかすぎない私立小学校の教育であるが、その教育を受けるのはどのような人々なのだろうか。普通に近所の公立小学校の教育を受ける人々と特に変わるところのない集団なのだろうか。たまたま近所に私立小学校があったので、ほとんどの人が子どもを近所の公立小学校へ入れるときと同じように特別の理由もなく、自分の子どもをその私立小学校へ入学させることにしたのであるか。それとも、私立小学校の教育を利用する人々は社会の特定の階層に集中しているのだろうか。彼らは公立小学校へ子どもを通わせている大多数の人々と子どもの教育に関して異なった考え方をしているのだろうか。

以上のようなことについて、愛知県のある私立小学校の在籍者の親を対象とした調査結果をもとに考えてみる。

#### (2) 調査の概要

私立小学校を利用する人々の階層とその意識を知るために愛知県のS学校在籍者の親を対象に調査を行った。その概要は以下の通りである。

1. 調査対象：愛知県S私立小学校（女子校）在籍者全員の両親  
ただし、回答は父母いずれかの一方をお願いをした。
2. 対象者数：姉妹で在籍している生徒の分を調査して最終的には130人。
3. 調査方法：学校を通して調査票を配布し、数日後に学校を通して回収した。
4. 調査時期：1989年12月
5. 有効回答数：130
6. 回収率：100%

## 2. 親の階層

### (1) 親の職業

S小学校在籍者の父親の職業は〈表－1〉のようになっている。

〈表－1〉 父親の職業 (%)

1. 商店・町工場・飲食店などの経営者	33.8
2. 企業の課長・部長・重役・支店長	26.2
3. 医師・薬剤師・公認会計士・技術者・教員などの専門職	12.3
4. 企業の事務職員	5.4
5. 企業の技能工・工員	2.3
6. 店員・外交員・セールスマン	2.3
7. 栄養士・デザイナー	1.5
8. 官公庁の職員	1.5
9. その他	14.7

商店・町工場・飲食店などの経営者が33.8%で最も多く、全体の1/3を占めている。次に多いのが企業の管理職（課長・部長・重役）で26.2%となっている。その次が、医師・薬剤師・エンジニア・教員などの専門的職業で、12.3%である。これら3つの職業で全体の70%以上を占めている。したがって、一応現在のところ、S小学校は自営業者の子女を中心として企業の管理職と専門的職業従事者の子女が主として通学する学校という性格を有しているといえるだろう。

問題はこのような職業構成が一般的なものなのかS私立小学校に特有なものなのかということである。

調査対象者と同年齢層の人々全体の職業構成どのようになっているのだろうか。

総務庁青少年対策本部が行った全国調査によれば、13、14、15歳のこどもを持つ父親で自営業に従事しているものは19.6%である（総務庁青少年対策本部、1992、275頁）。また国勢調査の結果から対象者と同年齢層と考えられる35歳－49歳の人々の職業構成は1980年の時点では〈表－2〉のようになっている（総務庁統計局、1985）。

〈表－2〉 父親と同世代の職業 (%)

	専門	管理	事務	販売	技能工	運輸・通信	農業	その他
35－49歳	7.1	9.0	12.2	13.8	37.7	8.6	6.6	5.0
全体	7.7	7.0	12.1	14.3	36.9	6.6	9.1	6.3

これらの全国的統計と比較すると、S小学校在学者の父親の職業構成はきわめて特徴的であることがわかる。「自営業者」「専門職」「管理職」が全国平均と比較して際だって多い。逆に言えば、全国的には約1/3を占める「技能工」がS小学校在学者の父親にはほとんどいない。したがって、父親の職業の面から見ると、S小学校の在学者は社会の特定の階層

から集中的に集まってきているということが出来る。

母親の職業の構成は〈表－3〉のようである。

〈表－3〉 母親の職業 (%)

1. 商店・町工場・飲食店などの経営者	11.5
2. 医師・薬剤師・公認会計士・技術者・教員などの専門職	4.6
3. 企業の事務職員	3.8
4. 企業の課長・部長・重役・支店長	3.1
5. 店員・外交員・セールスマン	1.5
6. 主婦専業	56.9
7. その他	18.6

母親は主婦専業（無職と考えていい）が最も多く、56.9%と約6割を占めている。職業を持っている母親では自営業が最も多くなっているが、それでもわずか11.5%である。全国的なデータをいくつか見てみると、総務庁統計局『労働力調査特別調査』（1988）によれば、末子が7－12歳の母親の無業率は42.3%である。末子が4－6歳の母親の無業率は59.1%である。また総務庁統計局『就業構造基本調査』（1989）によれば、調査対象者と同年齢層と考えられる女子有配偶者の無業率は、30－34歳では55.3%、35－39歳では42.1%、40－44歳では33.4%となっている。（労働省婦人局、1989）。これらの統計数値と比較すると、調査対象者となっている母親たちは若干主婦専業の割合が高いと言えるだろう。

## (2) 親の学歴

父親の職業という面ではS小学校の在籍者には明らかな特徴が見られた。次に親の学歴について見てみよう。S小学校在籍者の親の学歴はどのようになっているだろうか。はたして職業の場合のように際だった特徴が見られるのだろうか。

子どもを私立小学校へ入学させるかどうかに関しては、両親の最終学歴だけではなく、彼ら自身が小・中・高校で私立学校に在籍したかどうかに関係していると予想されるので、この調査では、最終学歴だけではなく、各学校段階ごとにどのような学校を卒業したかを尋ねた。

まず、最終学歴は〈表－4〉のようになっている。

〈表－4〉 親の学歴 (%)

	父親	母親
中等教育卒業	32.3 (42)	41.5 (54)
高等教育卒業	67.7 (88)	58.5 (76)

〈表－5〉 同世代の大学進学率 (%)

	1965	1970	1975	1980
男性	22.4	29.2	43.0	41.3
女性	11.3	17.7	32.4	33.3

父親の学歴は、中等教育（中学・高校）卒業者が32.3%であるのに対して高等教育卒業者が67.7%と、全体の2/3を占めている。高等教育卒業者は全国平均（表－5）の約2倍

になっていて、かなりの高学歴者集団であることが分かる。

母親の学歴は、中等教育卒業が、41.5%で、高等教育卒業が58.5%となっている。父親ほどではないにしてもやはり高学歴者集団であり、高等教育卒業者は全国平均のほぼ2倍で、過半数を占めている。

それでは設置者別（国公立別）の割合はどうだろうか。私立小学校在籍者の親は中学・高校で私学に在籍していた者の割合が高いのだろうか。

〈表－6〉 出身学校の設置者別割合 (%)

	父 親		母 親		
	国公立	私 立	国公立	S 学園	他の私立
中 学	77.9(60)	22.1(17)	76.3(61)	8.8(7)	15.0(12)
高 校	44.1(41)	55.9(52)	35.9(37)	10.7(11)	53.4(55)
短 大	25.0(1)	75.0(3)	3.8(2)	5.7(3)	90.6(48)
大 学	16.9(14)	83.1(69)	21.7(5)	21.7(5)	56.5(13)
大学院	100.0(5)	0.0	0.0	0.0	0.0

〈表－6〉は各学校段階別に国立私立いずれの学校を卒業したのかを尋ねた結果である。調査対象者と同世代の私立中学／高校在籍の割合（男女合計）は〈表－7〉のようになっている。

〈表－7〉 親の同世代の私立学校在学率 (%)

	中 学	高 校
1965	3.0	32.8
1970	3.0	30.4
1975	3.0	30.2
1980	2.9	28.1

まず、中学に関しては全国平均が3.0%であるのに対して父親は22.1%と約7倍であり、母親は23.8%と約8倍になっている。中学に関してはもちろん公立を卒業したの方がはるかに多いとはいうものの、全国平均では3%とほとんど無視しうような数であるのと比べると父親は1/5、母親は1/4と十分な割合を占めている。

また高校に関しては、全国平均が約30%であるのに対して父親は56%、母親は64.1%と両者とも約2倍になっている。S小学校在籍者の親の中では高校は私立を卒業した者が父親母親いずれの場合も多数派というわけである。

結局、S小学校在籍者の親は両親とも中学・高校において私立学校を卒業した者が全国平均と比べると非常に多くなっている。

また、S学園の出身者の割合を見ると、S中学校を卒業した母親が8.8%、S高校を卒業した母親が10.7%、さらにS大学を卒業した母親が21.7%となっている。実数が少ないので断定はできないが、傾向としてはやはりS学園の卒業生の比率が高いと言えるだろう。しかし他方、S小学校在籍者の母親のほとんどがS学園に在籍したことがなかった女

性であり、S小学校が卒業の子女の教育機関になっているわけではないことも確かである。

以上からS学校在学者の出身階層は現在の日本社会の平均像の縮図ではなく、特定の階層に集中していることが分かった。すなわち、父親の職業は「自営」「専門職」「管理職」に集中しており、母親は専業主婦が多い。そして両親の学歴はそろって高い。

### 3. 親の教育意識

#### (1) 期待する教育内容

S小学校在籍者の親が教育に関してどのような考えを持っているのかを見てみよう。ただし、今回は同一の調査票でS学校以外の小学校を対象とした調査は実施しなかったので、一般的な傾向との比較分析はあまり行わず、主として本調査で捉えた限りでの彼らの意識を分析する。

学校教育のなかで子どもが多かれ少なかれ身につけることを期待されている能力・態度・性格は様々である。そのうちのいくつか挙げてそれらがどの程度大切であると思うかを尋ねた。その結果が表－8である。

〈表－8〉 子どもの教育で大切なもの (%)

	あまり大切でない	ある程度大切	とても大切
1. 優しさ	0.0	7.8(10)	92.2(119)
2. 何事にも自分の考えを持つこと	0.0	18.8(24)	81.3(104)
3. 人と協調する態度	0.0	32.0(41)	68.0(87)
4. 女らしさ	4.6(6)	36.2(47)	59.2(77)
5. 学力	1.5(2)	69.2(90)	29.2(38)
6. 大人への従順性	11.5(15)	63.3(81)	25.0(32)
7. 競争心	6.2(8)	79.1(102)	14.7(19)
8. 自分の考えをなるべく抑える態度	11.8(15)	75.6(96)	12.6(16)

それぞれの項目について「とても大切」であると答えた人の数を比較してみよう。

圧倒的多数の親が「とても大切である」と答えたのは、「優しさ」(92.2%)と「何事にも自分の考えを持つこと」(81.3%)の二つである。次に支持が多かったのは「人と協調する態度」(68.0%)と「女らしさ」(59.2%)である。過半数の親の支持を得られたのは以上の4つであった。さらに、「学力」が29.2%、「大人への従順性」が25.0%、そして、「競争心」が14.7%、「自分の考えをなるべく抑える態度」が最も少なく、「とても大切である」と答えた親はわずか12.6%しかいなかった。

この結果はいくつかのことを推測させる。

① 一般に「現代日本の親たちは、学歴社会を前提として、学校に対して子どもに学力をつけることを過剰なまでに期待している」という通念があり、実際それが実情であることは各種調査からも伺える。しかし、S小学校の生徒の父母に関してはそれは当てはまらないと思われる。

「受験競争」を勝ち抜いていくことを子どもに期待していたら、「学力」を高める

ことや「競争心」を形成させることを学校の教育により強く期待することになると予想される。それらと比べると「優しさ」や「何事にも自分の考えを持つこと」などはあまり重視されないのではないと思われるが、調査の結果は全く逆であった。S小学校在籍者の親たちは前者よりも後者の方をはるかに大切にしている。もちろん「学力」や「競争心」が大切でないというわけではない。実際、「ある程度大切」と答えた親は「学力」については69.2%、「競争心」については79.1%に上る。しかし、「とても大切」かと言われればそれほどではないということなのだろう。「学力」や「競争心」の大切さは「ある程度」のものでしかないが、「優しさ」は「とても大切」なものなのだ。

ただし、この結果から「S小学校在籍者の親」はより高い学歴を子どもに期待していないと推論したとしたらそれは誤りである。あとで見るように彼らはむしろ平均的な親たち以上に子どもたちに高い学歴を期待している。だから上の結果が示しているのは、彼らが「学歴」という社会的な肩書を子どもたちに求めるか否かはともかくとして、子どもたちのパーソナリティとしては、「学力」や「競争心」よりも「優しさ」や「自主性・主体性」の形成を大切と感じているということである。

② 「自分の考えを持つこと」が「とても大切だ」と答えた親が8割を越えた一方、逆に「自分の考えを抑える態度」が「とても大切だ」と答えた親は1割ほどしかいなかった。このような〈自主性〉〈主体性〉を重視する考え方は「大人への従順性」への反応にも表れている。「大人への従順性」が「とても大切である」と答えた親は25%とやはり非常に少ない。

日本社会は全体としていわゆる「集団主義」社会であって、自分の考えを主張することはどちらかといえば好まれない。学校という社会も同様である。また、一般に親たちも学校に対しては、その中で子どもが集団生活に適應する態度を形成していくことを期待しているはずである。とすれば、「大人への従順性」や「自分の考えを抑える態度」を大切と考える親がもっと多くていいはずである。ところが調査の結果は逆の傾向を示している。

この調査結果はどう解釈するべきなのだろうか。S小学校在籍者の親が日本社会の平均的な人々と特に違った教育観を持っているということなのだろうか。そう言える面もおそらくある。先に指摘したように彼らは際だった高学歴者集団である。一般に高学歴者は自主性・主体性というものを人間にとって重要なものとして高く評価する傾向にある。自らの行動においてより自主的・主体的であることに高い価値を置いているし、自分の子どもたちにもそのような行動の仕方を期待することは十分ありうる。

あるいは、親が子どもに期待する人間的価値（態度・性格）は自分が日常的に従っているものとは違うものになることがあるという解釈も成り立つ。自分自身はいわば「現実的な」価値観に従って行動しながら子どもには「理想的な」価値観を持ってもらいたい。そういう気持ちの表れと考えることもできるかも知れない。自らは日常の生活のなかで「自分の考えを抑えて」いる。ということはそのような態度・行動の規範が大切だと現実的には感じているのだが、他方、自分の考えを持ち、抑えずに主張することの大切さも知っていないながらその実行は末だ「願望」にとどまっている。その願望が子どもへの期待となつてより強く現れていると考えることもできる。

③ 「大人への従順性」「自分の考えをなるべく抑える態度」「協調性」「女らしさ」「優しさ」は普通は比較的似たような意味である。すなわち自律的・主体的に自分の頭で考それに従って行動したりするのではなく、他人（子どもにとっては特に大人、女にとっては特に

男) が考え下した判断に従って自分の行動を起こすような態度や性格を表す表現である。だとすれば、「とても大切」と答えた割合も同じようなものになるはずであるが、実際には大きな差を示している。「大人への従順性」「自分の考えをなるべく押さえる態度」がとても大切だと考える親がそれぞれ25.0%、12.6%と少数であるのに、「人と協調する態度」「女らしさ」がとても大切だと考える親はそれぞれ68.0%、59.2%となっている。そして、「優しさ」がとても大切だと考えている親は92.2%とほとんど全員である。

これは一見類似に思える上記の態度・性格の間には微妙な違いがあり、それを人々が意識していることを示しているのではないだろうか。その違いを別の言葉を使って表現すればこうなるだろうか。「大人への従順性」「自分の考えを抑える態度」は〈反主体性〉〈没主体性〉を意味している。それはまさしく「自分の考えをもつこと」の正反対の態度・性格である。それに対して「優しさ」は「主体的」の反対概念ではなく、それとは次元の違う概念である。「優しさ」は〈他者（特に弱い傷ついた他者）への共感能力〉を示す概念である。そうして「協調性」と「女らしさ」は〈反主体性〉と〈他者への共感〉とを同時に含んでいる概念である。

そう考えることによって初めて三つのグループの数字の違いが理解できるのではないだろうか。さらにまた「優しさ」と「自分の考えをもつこと」とがともにほとんど全員の支持を得ていることも理解できる。

以上のように考えると、結局、S小学校在籍者の親たちは子どもたちに〈主体性〉と〈他者への共感能力〉の形成を期待し、没主体的な人間になってほしいとは思っていないということになる。

## (2) 子どもに期待する学歴

前項ではS小学校在籍者の親たちが自分たちの子どもにどのような内容の教育を期待しているのかを見たのであるが、では彼らが子どもたちに期待している学歴はどの程度のものなのだろうか。

〈表－9〉 子どもに期待する学歴（調査対象者） (%)

高校卒	短大卒	大学卒	大学院卒	その他	まだ考えていない
0.8(12)	20.8(27)	60.8(79)	3.8(5)	2.3(3)	11.5(15)

〈表－9〉を見れば分かるように、四大卒希望者だけでも64.6%である。短大卒希望の21%を加えると、なんと約90%もの親が高等教育段階までの学歴を子どもに期待している。

1985年に内閣総理大臣官房広報室が行った調査によれば、本調査の対象者とほぼ同年代である30歳代の日本人に「女子はどの程度の教育を受けたらよいか」と尋ねたところ、その答えは〈表－10〉の通りであった。

一般的に尋ねた場合と自分の子どもに関して尋ねた場合との違いを考慮したとしても、S小学校在籍者の親の期待学歴がいかに高いものであるかがわかる。

では、そのように高い学歴を子どもに期待する理由は何であろうか。

いくつかの選択肢からいくつでも選んでもらった結果が〈表－11〉である。

〈表－10〉 子どもに期待する学歴（全国）（％）

中学校	高 校	短期大学	大 学	わからない・その他
0.5	30.1	25.0	12.2	32.2

〈表－11〉 子どもに大学進学を期待する理由（％）

1. 幅広い教養を身につけてほしい	83.9(94)
2. 将来になにかと有利	32.1(36)
3. 高度な知識や技術を身につけてほしい	26.8(30)
4. 学生生活は少しでも長い方がいい	17.0(19)
5. 就職する際に有利	8.0(9)
6. 良い結婚相手と出会える	6.3(7)
7. その他	3.6(4)

〈表－11〉を見ると、最も大きな理由は、「幅広い教養を身につけてほしい」ということである。大学教育の本来の目的は「高度な専門的知識の獲得」と「幅広い教養の形成」と言ってもよいが、S小学校在籍者の親たちはまさにその一方の目的を目指しているというわけである。一般的には、大学進学はそのような「建前」の目的よりも就職や結婚に有利になるという「世俗的」な利得のために求められているという通念がある。だとすればそれらを選んだものも多くいてもいいはずであるが、この調査のなかでは「就職や結婚の際に有利になるから」と答えた親はきわめて少なかった。また男子に関する調査の場合は回答が多い「高度な知識や技術を身につけてほしい」という答えも26.8％と少なかった。

もちろん、このような数字が出たからといって、ただちに、「彼らは就職や結婚のことは考えていない」という結論を導き出したらそれは誤りであろう。このような質問にはえてして建前で答えやすいものだから。

しかし、少なくとも、彼らの意識の中では、こどもが短大や大学へ進学することによって、就職や結婚で有利になることよりも、幅広い教養を身につけてくれることのほうが大きな意味を持っていると言うことはできるのではないだろうか。

あるいは、「幅広い教養の形成」という目的と比べると「就職や結婚のための肩書の取得」という目的は意識の奥底に退いてしまっているといってもいいかもしれない。

#### 4. S学園に対する親の意識

##### (1) 子どもをS小学校へ入学させた理由

S小学校在籍者の親たちはなぜ自分たちのこどもをS小学校へ入学させたのだろうか。公立小学校在籍者の親の場合であれば、近所の公立小学校へ子どもを入学させるのにこれといって特別な理由はないだろう。たまたまその地域に住んでいるから。理由はそれだけで十分である。

しかし、S小学校在籍者の場合はやはり何か特別な理由があると考えの方がむしろ自然だろう。日本中のどんな地域にも公立小学校は必ずある。その近所の公立小学校をやめて



あえて私立のS小学校を選んだのにはなにか理由があるはずである。それは一体何なのだろうか。「なぜ子どもをS学校へ入学させたのか」という問いに対する答えは〈表-12〉のような結果となった。

〈表-12〉 子どもをS小学校へ入学させた理由 (%)

1. 一貫した教育理念をもってきちんとした教育を行っているから	50.8
2. 受験競争をさせたくないから	46.9
3. 女の子らしく育ててほしいから	43.1
4. 大学まで進学させたいから	29.2
5. 近くの公立小学校には入れたくなかったから	21.5
6. 自分も私立学校でよう教育を受けたから	20.8
7. 公立の中学高校は荒れているから	19.2
8. S学園の世間の評判がいいから	17.7
9. 女子だけの学校だから	6.2
10. 公立中学高校は管理が強すぎるから	6.2
11. S小学校が近かったから	4.6

この結果から次のような点を指摘できる。

① 「一貫した教育理念を持って、きちんとした教育を行っている」「受験競争をさせたくない」「女の子らしく育ててほしい」の三つの項目がそれぞれ約半数の回答を得ている。これらはその質は異なるもののいずれもそれなりにS小学校の教育の中身への共感を示す具体的な支持理由である。それに対して、「世間の評判がいいから」とか「S小学校が近いから」といった理由が少ない。これらはS小学校の教育の内容を踏まえていない漠然としたあるいは偶然の支持理由である。

ここから判断する限り、親たちは自分なりの教育的観点をしっかりと持っていて、それを尺度にしてS小学校の教育を評価・判断したうえで子どもを入学させていると言っているのではないだろうか。この点は一般の公立小学校へ子供を入学させている親の場合とは大きく異なるのではないと思われる。

② 「一貫した教育理念をもってきちんとした教育を行っている」という理由が最も多いが、この表現自体はその教育の内容を示していない。親たちはS小学校のどのような教育内容を評価したのだろうか。

「一貫した……」を別にすれば、「受験競争をさせたくないから」が46.9%と最も多く回答を得ている。この「受験競争をさせたくない」は二つの意味を含んでいると考えられる。

一つは、「公立中学には受験競争があってそれは子どもにとって苦痛である。そのような苦痛は自分のこどもに与えたくない」というもの。すなわち公立中学を回避した結果消極的に私立小学校であるS小学校を選んだということである。

「近所の公立小学校には入れたくなかった」や「公立中学高校は荒れている」あるいは「公立中学高校は管理が強すぎる」などの理由も消極的なS小学校選択を示している。この面ではS小学校の教育内容が特に好ましいから選ばれたのではなく、公立小学校の教育内容が良くないのでそれを避けたら結果的にS小学校が残ってしまったにすぎない。

もう一つの意味は、「公立中学高校の受験競争の中では望ましい人間に育たない。受験

競争のないS私立小学校であればいい内容の教育をしてくれるだろう」というものである。これはS小学校の教育を積極的に評価した結果の選択であると考えていい。そのことをよりはっきり表現しているのが「女の子らしく育てほしい」という理由である。この理由をあげた親は「受験競争を……」とほぼ同数の43.1%である。また、もう一つの積極的な理由として調査結果から読み取れるのは「大学まで進学させたい」というものである。「受験競争をさせたくない」とは「大学進学をさせたいとは思わない」ということではなく、「受験のための競争をすることなく大学へ進学させたい」ということである。大学までの一貫教育を謳っているS学園はまさに「受験競争」によって「女の子らしさ」を失うことなく大学までの進学がある程度保証されている学校である。

「受験競争をさせたくない」の意味としてどちらが正しいか。おそらく両方の意味が含まれていると考えるべきだろう。

以上をまとめてみると、S小学校在籍者の親が自分の子どもをS小学校へ入学させた理由は次のようになるのではないだろうか。

「大学まで進学させたい。しかし、公立中学高校では受験競争が激しく行われている。そのなかに巻き込まれると女の子らしく育たないだろう。女の子らしく育ち、なおかつ大学まで進学させるには私学教育がいい。そしてまさしくS学園ではそのような教育をきちんとやってくれているらしい。」

## (2) S小学校卒業後の予定

最後に、子供がS小学校を卒業した後、どのような進路を親は予定しているのか、それを見てみよう。どの程度の学歴を期待しているかはさきに見た通りである。ここでは中学・高校・大学の進学に関して、S学園の内部で進学させていくつもりなのかそれとも他の公立学校や私立学校へ進学させようと思っているのかについて見る。

〈表-13〉 S小学校卒業後の予定 (%)

中学	S 中学	公立中学	まだ考えていない	
	87.7 (114)	0.0	12.3 (16)	
高校	S 高校	他の私立高校	公立高校	まだ考えていない
	80.8 (105)	0.0	0.0	19.2 (25)
大学	S 大学	他の女子大	共学の大学	まだ考えていない
	61.5 (80)	0.0	1.5 (2)	36.9 (48)

中学進学についてはS中学を希望する親が86.7%、高校でS高校を希望する親は80.8%と、ほとんどの親は子どもをS学園の内部で中学・高校へ進学させようと考えている。また大学については、やはりS大学を希望する親が多く、61.5%と過半数を占めている。さらに、中学・高校・大学いずれの進学についても、現在S学園内進学を予定していない他の親の場合も、S大学以外の女子大や共学の大学への進学を希望しているわけではない。彼らはまだ具体的に計画をたてていないというに過ぎない。

こうしてみると、あらためて、S小学校へ子供を入学させるのは中学も高校もそして大

学もS学園で一貫して教育を受けさせたいからだということがわかる。

## 5. おわりに

日本全体の傾向からみれば非常に少数の私立小学校在籍者がはたして特定の階層からの出身者であるか否か、それがはじめの問題だった。

以上に見てきたように、親の職業の点ではあきらかに一部の職種に集中していた。「管理職」「専門職」「自営業」の三つである。

前二者は現代社会の中では一般的に職業的威信の高い職業であり、その職業に従事している人々の学歴は一般的に高く、経済的・文化的に恵まれた「エリート」である。後者の自営業は、現代（近代）社会の中では職業的威信の面でもあるいは経済的・文化的水準の面でも必ずしも高くはない伝統的な職業である。従ってその意味では性質の異なった二つの職種群を私立小学校は生徒供給源としているといえる。

学歴の面からみると、両親ともに高学歴者集団である。職業別に父親の高等教育卒業の比率をみると、管理職では70.1%（24人）、専門職では93.8%（15人）と、両者は当然のことながら高くなっているが、自営業の場合でも59.1%（26人）と、過半数に上る。すなわち、いずれの職業の親も学歴という点では同じように高学歴であるということである。

意識の面から見ると、全国的な傾向との厳密な比較はできなかったが、「学力」や「競争心」より「優しさ」や「自分で考える態度」の形成を学校教育に期待する点、あるいは子どもに期待する学歴の高さなどに私立小学校在籍者の親たちの特色が伺えた。

以上をまとめてみると、職業や学歴の階層の面からもまた意識の面からも私立小学校に子どもを入学させる人々は現代日本社会の平均的な階層ではなくある特定の階層の人々であるといっていだろう。

## 参考・引用文献

- 1) 総務庁青少年対策本部『中学生の母親』大蔵省印刷局、1992
- 2) 総務庁統計局『職業構造からみた人口 昭和55年国勢調査モノグラフシリーズNo. 5』日本統計協会、1985
- 3) 労働省婦人局『婦人労働の実情 平成元年版』大蔵省印刷局、1989